



荒神



川崎ゆきお

「親を見れば子が分かるって、本当かもしれないねえ」

「子を見れば親が分かるってのはどうですか」

「それもありがちかも」

「要するに親子は似ていると」

「両親どちらも小心者で、地味な暮らしぶりで大人しい。まあ、反動で荒っぽいことをするかもしれないけど、大物にはならない。大悪党にはね」

「それは、子は親を真似るからでしょうか」

「さあ、それは分からないけど、身近な大人で、そういう意味での完成品を見ているからねえ」

「完成品ですか」

「モデルだろうねえ。これが何も分からない頃から見ているので、始末に悪い」

「はい」

「貧相な親だと、子も何となく貧相になる。これは教育では何ともならん。埋め込まれ、植え込まれたのだろうねえ。小さいときに。これは抜けない」

「貧相な子はだめですか」

「そんなことはない。ただ、小さな世界で、地味に暮らしている限りはね。こちらのほうが平和で、ふつうの人生を送れる。特に何も無いような、平凡なね。ただ、これはその人に聞いてみないと分からないけど、決して平凡なものではないのだろうねえ」

「誰だって人生いろいろありますからねえ。大変なことが」

「災難もある。身に降りかかったね。自分のせいではなく、巻き込まれたとかも。そういうのをくぐり抜けた来たんだよ。それは伝記にするほどのことじゃなくても」

「先ほどの親に似る話なんですが」

「ああ、何かね」

「態度なんかもそうですか」

「礼儀作法のようなもんだね。しつけができている子か、そうではない子かの違いも大人になると出るだろうねえ」

「じゃ、家庭教育は大事ですねえ」

「親がなくても子は育つとも言う」

「はあ」

「下手に植え込まれていないほうが、いい場合もあるしね」

「何でもありですねえ」

「しかし、やはりお里が知れるとかはあるねえ。馬脚を現すとかも」

「それは悪い里なんでしょうねえ」

「え、どうして」

「だって、その言い方は悪い方でしょ」

「ああ、そうだねえ」

「要するに性格の話ですか」

「そうだね」

「はい」

「私あまり荒っぽくないのは両親とも大人しい人でねえ。まあ、大過なく人生を過ごしたのか、極限状態などはあまりなかったんだろう。だから、大人しいままで過ごせたんだと思う」

「え、どういうことですか」

「本当は大人しくない人だったのかもしれない。ただその面を出すシーンがなかっただけ。またはずっと我慢していたのかもしれない」

「そうなんですか」

「親に似て私も大人しく、そして貧相だ。しかし、何か燃えるようなものを持っている。荒神がいる。荒ぶるものだ。これは親とは似ていない。しかし、親はその荒神を封じていたんじゃないかと思うんだ」

「どうしてですか」

「それを出すと、損だから。まあ、それを出すここ一番もなかったんだろう」

「荒神を隠していたのですか」

「荒神、夜叉でもいい」

「はい」

「私は出してしまった。だから今は悔やんでいるよ」

「それを出されたから、大活躍されたわけで」

「しかし、根が貧相でねえ」

「いえいえ、そんなことは」

「荒神を出すか出さないか、心して決めるべきだった」

「荒神さんへお参りに行きましょう」

「なんだい、いきなり」

「荒ぶる心に効きます。荒神さんは」

「あれは竈の神さんだろ」

「そうなる前は荒ぶる魂の神さんだったのです」

「じゃあ、私も竈の神様になるか」

「はい、家内安全です」

「いや、我慢できない」

「あ、はい」

了